巻　頭　言

NISS から OCNC，ASCONE へ

ATR 脳情報研究所　　銅　谷　賢　治

アメリカのウッズホールやヨーロッパのクレタ島でやられているような，計算神経科学のサマーコースが日本にもあってもいいじゃないか，という思いから「神経情報科学サマースクール（NISS: www.jnns.org/niss）」を湘南国際村で開催したのは 1999 年のことである．当初は学会の予算枠すらなかったものの，「金はなんとかするから思うようにやってくれ」という当時会長の塚田稔先生の情熱と，「基礎が大事だからって先端を切り落としたような講義はダメ」という藤井宏先生の理念と，旅費は自前でかけつけていただいた講師の先生方のおかげで，実験系，理論系の若手がほぼ 1 週間泊まり込みで議論し共同作業するという，他に類をみないスクールを立ち上げることができた．

2003 年まで 5 回の NISS は約 200 名の卒業生を送り出したことになるが，工学や物理系出身でも神経科学の最新の論文を読みこなしてモデル化し，実験室から生のデータを解析できる若手は確実に育ってきた気がしている．オーガナイズにはそれなりに手間もかかったが，JNNS をはじめ学会や論文誌で卒業生の活躍を目にするたびに手応えを感じている．

そして 2004 年春，沖縄科学技術大学院大学（OIST）の立ち上げにかかわることになり，我田引水ながら NISS を沖縄で開こうかと考えていた矢先，学長就任予定のシドニー・ブレナー先生から電話があり，沖縄で国際的なサマーコースを開催しないかという話になった．NISS とどう折り合いをつけるべきか考えたものの，世界中の学生と交流することで日本の学生が得るものも多いだろうと考え，その年から Okinawa Computational Neuroscience Course（OCNC, www.irp.oist.jp/ocnc）として模様替えすることになった．幸いこちらも，世界中から気鋭の講師陣と活発な学生達を集めることができ，今年はついに 3 週間でニューロン，ネットワーク，行動までをカバーする総合コースに成長した．沖縄でなにやら面白いことが始まっているぞ，というのを世界的に広めるのに貢献できたと思っている．

ただし残念なのは，英語の文章による選考のしきいが高かったせいか日本国内からの応募が少なく，共催団体である JNNS の会員は優遇しようにも候補者が少なすぎるということである．JNNS 会員の固定枠があるわけではないが，かなり確率は高くなっているので，若手の会員の皆さんにはぜひふるって応募を考えていただきたい．

しかしやはり日本語でとことん議論する若手合宿も必要だろう，ということで NISS の常連であった酒井裕さん，鮫島和行さんらに国内版を再生してくれないかとプレッシャーかけ続けたところ，見事昨年から Autumn School for Computational Neuroscience（ASCONE, spike.eng.tamagawa.ac.jp/ASCONE/）を開催してくれた．私はかけ声だけで実質的には何もしていないが，次の世代が次の次の世代を育て始めてくれたのを大変嬉しく思っている．